

「夜陰に乗じて城を捨てる。まずは根木内城へ落ちて、今後のことを考えよう。各々支度に移れ。ただし敵に気取られるな」

城内の兵糧をすべて炊き出しするよう胤清は沙汰した。そうすれば決戦と見なし、敵は迂闊に近づいてはこない。

その炊煙のなか、口惜しげに入道善寛は真里谷陣を睨むのであった。

永正一四年一〇月一四日、小弓城は陥落した。

足利義明は悠々とこれに入城し、以後、この城を御所と定めることを決した。

小弓城陥落を知った千葉介勝胤は、遅い援軍を根木内城へと差し向けたが、もはや奮還は不可能であった。

「真里谷の者はよく働いた。以後は儂を〈小弓公方〉と呼ぶがよい。儂は真里谷家を〈房総管領〉と呼ぶであろう」

足利義明は上機嫌でそう触れた。

真里谷信勝は恭しく承り

「御所に従うからには、我が諱も信嗣と改めましょう」

「従う、そういうことか」

「御意。御所には若い力が必要ゆえ、これより儂は隠居となり、真里谷の家督は倅に譲る所存」と応えた。信嗣の嫡子は信保という。

「されば三河守を名乗り、我が意に添うがよい」

「はっ、有難き幸せ」

義明より三河守を下賜された信保は、呻くように応えた。

この戦いに与力として参じた里見家へは、このとき、特段の沙汰はない。

小弓合戦のちも、里見義豊は足利義明へ附くことを躊躇っていた。

「困ったものよな」

奉行衆は苦り切っていた。

このままでは、里見氏は孤立する。

下手をすれば、真里谷一族から攻撃されることもある。

「飴と鞭、それしかあるまいか」

里見実堯はひとつの策を示し、奉行衆も

「これしかあるまい」

と同意した。

里見実堯は実弟・中里備中守実次に、義豊への献策を打診した。中里実次は義豊の叔父であるとともに、舅という立場もある。そのため義通や実堯を理解しつつ、義豊に附く律儀な性格であった。

献策とは、義豊の知識欲を擦るものだった。

「小弓の新公方は鎌倉の学僧と親しいとのこと。無論、玉隠禪師とも懇意の由。小弓の公方に親しくしておくことは、里見家にとっても有益なり」

このことを実堯が具申しても、義豊は快く思うまい。が、中里実次ならば、少しは聞く耳もあるう。

果たして義豊は、その献策に関心を示した。

たしかに、原氏支持の真意は足利高基への遠慮ではない。高名な連歌師と交わる知識人という羨望もあるのだ。

「それ以上の文化人と誼を通じるのならば、小弓も古河も変わりはあるまい」

この籠絡は、見事、的中した。

里見義豊は小弓への使者として、里見実堯を立てた。小頼な奉行衆も、こういう外交に関しては頼りとせざるを得ない。

小弓公方の宣言は、房総の諸豪族に大きな影響を与えた。千葉一族の中堅として宗家を支えてきた白井太郎景胤が、この宣言の熱に浮かれて小弓公方に応じたことは、一族に激しい動揺を与えた。

「不忠、これ前代未聞」

古河公方・足利高基は千葉氏の内憂を話るとともに、これの発端たる実の弟の行動を強く批判した。

千葉介勝胤は立場もない。

そうだろう、臣下である原氏没落と白井氏離反、このような不手際により古河公方から名指しで叱責を被ることを恥じぬ筈などない。

足利高基が評価している小田原の伊勢氏に

「何卒、お頼み申し上げ候」

と支援を継ぐのも、古河公方の立場からいえば道理と云えよう。

伊勢宗瑞は前年より三浦陥落の余勢を駆り、真里谷攻めの軍勢を房総半島に送り込んでいた。そんななか、永正一六年（一五一九）、古河公方高基は上総へと軍勢を發した。

小弓改修に伴い、足利義明は真里谷勢力下の椎津城に移っていた。

古河公方足利高基の差し向ける軍勢は、そこを攻撃した。

下総弥富城を拠点に千葉勝胤を主力とした高基には、もはや弟に対する肉親の情を抱いては居ない。

「今ここで芽を摘まねば、大事となる」

そう触れ回り、義明の御級を討つことを強く望んだ。

この戦いは高基・義明兄弟が直接睨み合ったものであった。諸将はそれを憂慮し、ただ睨み合いに徹した。

このとき、武功を挙げたのは、小弓公方方に附いた里見氏であった。武力衝突とその長期化は望むものではない。これを回避する策として、軍を退かせるしかなかった。そのための策は、こうである。

和良比城に進出した里見義通は、自ら関宿城へと攻める兵配りを見せたのである。

「関宿はいま裸も同然。あれが落ちると、古河も危険である」

高基はただちに退くべしと叫んだ。

かくして、古河公方は里見義通により切っ先を制された。結果的には、里見勢がこれを撃退したことになった。

このとき古河公方へ荷担する名目で、伊勢宗瑞の嫡子・新九郎氏綱が茂原へ乱入した。しかし古河公方勢が撤収するに及び、伊勢方も撤退を余儀なくされた。

里見義通はこの武勲が買われて、その後も下総への転戦を命じられた。そして義豊自身も戦場に従い、寄騎する在地豪族の生々しい感情に

曝されることとなる。

この椎津城を巡る合戦により、小弓公方の基盤は盤石となった。

その盤石の礎として、里見氏の功績は大きい。

このち小弓公方は「懐刀として真里谷氏」を頼み

「軍事の要として里見氏」

を重用していくこととなる。

十十十

小弓の嵐(5)

夢酔 藤山